



写真(図版):「青森市全図」所載の「二百八十年前ノ青森」
=1906(明治39)年5月20日発行・青森市民図書館歴史資料室所蔵

1906(明治39)年5月20日、青森市内合浦公園を会場に「開港及開市二百八十年紀年祝賀会」が青森県内外から多くの来賓を招き盛大に催された。ここでいう「開港」とは、同年4月1日をもって青森税務署内に函館税関青森出張所が開設となり、青森港が特別貿易港に指定されたこと

とをいう。一方「開市」とは17世紀前半の青森の「町立て」をいう。「開市二百八十年」というのは、周年行事としては何とも座りが悪い。だから、この祝賀会は「開港」祝賀に合せた催しであるというのが通説的な見方のようにだ。しかしそれは誤りで、実は日露戦争の戦捷記念と

「開市二百八十年」とを組み合わせた行事として、市議員柏原彦太郎らが市参事会に働きかけたことにその端緒があったのである。しかも、それは1906(明治39)年ではなく、日露戦争の講和条約調印から間もなくの、前年10月のことであった。したがって「開

市二百八十年」の起点も、1905(明治38)年の280年前となる1625(寛永2)年を指す。

ただ、青森市民にとつて、1892(明治25)年頃からの青森港の開港論や開港運動が、特別貿易港の指定という果実を得たインパクトは大きく、1906(明治39)年4月以降は祝賀行事の当初の目的であった日露戦捷は後景に退き、「開

青森「開市」

280年祝賀会

工藤 大輔

(青森市民図書館
歴史資料室室長)

港」の二文字が浮かび上がってきた。また、市も当初は「開港」のみで祝賀会を開くつもりであったようだ。

一方、周年行事として「開市二百八十年」がしつくりこないのは当時の人も同感で、彼らは祝賀会終了後に開市300年行事の参考資料となるように、この祝賀会に関する報告書をまとめていた。

さらに商業会議所会頭大坂金助、市議員石館喜久造や樋口喜輔ら9人が、「開市二百八十年の市民祭」を後世に伝えるべく、合浦公園に建碑の運動を展開した。新聞報道や報告書によれば、建碑は順調に進んできているように思えるが、少なくとも現存はしていない。

現在、この祝賀会を伝えるものは報告書のほか、「青森開港及開市二百八十年祝賀会紀念青森市全図」という地図を確認している。この地図には「千年前ノ青森及安瀉」「二百八十年前ノ青森」という2枚の絵が配置されている。絵自体はあくまで想像・イメージ図なので歴史資料としての価値は低い。しかし、これを描いたのは、青森県内では初めての洋画の研究会とみられる洋画研究会を立ち上げた大和田徳治(高知県出身)であった可能性がある。そうであれば青森県の美術史資料として価値あるものとみられる。ところで、この祝賀会の

開催日は当初5月13日の日曜日が有力であったが、5月15日に決まった。これは、1625(寛永2)年「開市」の根拠が、同年5月15日付の文書であるという歴史的背景を知っていた関係者が主張したものとみられる。

ところが、これが後に5月20日変更となった。理由は、来賓として出席することになった農商務大臣の都合であった。この日程変更に関して、報告書は「一大恨事」と記している。ここには、開市300年行事は5月15日に開催して欲しいという強い願いが込められているように思うが、新聞報道による限り、該当の日には何等かの行事を催した形跡はないようだ。

間もなく青森市は「開市」400年を迎える。市民はこれとどう向き合うことになるのだろうか。「開市」280年祝賀会を振り返り、当時の人々の想いとともに、地域の歴史を次の世代に伝え、残すことは簡単なことではないと改めてそう思う。

『東京と青森』662号
東京青森人会 2023年6月号